

# 被服における意識の変容に関する授業実践

平井 早苗\*

Sanae HIRAI

A Teaching Practice of Change of Consciousness in Clothing

## 要 旨

本研究は、2017年度前期に島根大学教育学部で専門教育科目「着ごちの科学」の授業を受講した大学生（以後、受講生と記す。）を対象にして授業実践を行い、毎授業後の個別ふりかえりカードや授業内における教師の質問に対する考え・感想等の内容分析を行った。この結果を基に、現代社会に生きる受講生の被服における意識が、授業実践によってどのように変容していったかを明らかにすることを目的とした。併せて、受講生の衣生活管理能力が向上するためにはどのような授業内容が有効かを検討することにした。

授業開始直後と全授業終了後の受講生の被服における意識を比較した結果、受講生にとってファッションという着飾るためのものであり、実生活に必然的に存在し、着ることは当たり前前の行為になっている被服について、自分との関わりから捉え、着ることの意味を問い直す意識へと変容したことが分かった。また、受講生の被服における意識の変容は、授業を重ねる毎に深まっていったことがうかがえた。

これらの被服における意識の変容理由としては、著書の抜粋を用いて被服と人との関わりに着目するようにしたことや被服における“着ごち”を機能面と心理面の二側面で捉えたこと、被服の歴史や被服管理の内容を実際に体験したり実生活と結びつけたりしたことなどの授業実践を行ったことが考えられる。

本授業実践を通して、衣生活管理能力の向上につながるであろうと考える意識も表れたが、明確なものとは言えない。そこで、今後の課題として、衣生活管理能力の概念をより明確、かつ具体的にした上で、その能力を向上させるために有効な授業内容の検討が必要である。

【キーワード：被服における意識、意識の変容、衣生活管理能力、現代社会に生きる受講生】

## I はじめに

ハイブランドとファストファッションが共存していると言われる現代日本<sup>1)</sup>において、若者達は、ファッション関係の情報に触れる機会が多いこともあり、流行に敏感である。また、年々、服装についての自由化が進み、自分らしい服装や自分らしい色彩を楽しんでいる<sup>2)</sup>傾向にある。受講生も紛れもなくその時期にあると言ってよい。ましてや、物質的に豊かで、既製品の選択や購入が容易な消費社会になっている近年、「着ることの意味が以前より軽んじられている」<sup>3)</sup>と断言するファッションデザイナーもいるように、被服（本研究では、被服を狭義の意味である“人体の主要部を覆い包むように着るもの”として扱うことにする。<sup>4)</sup>また、文中にある衣服は被服と同じ意味を示すものとする。）は、実生活に必然的に存在し、着ることは当たり前前の行為となっている。

このような現代社会に生きる受講生が、被服について

どのような意識をもっており、その意識が授業実践によってどのように変容していったかを明らかにすることにした。また、被服における意識の変容を分析することに併せて、受講生の衣生活管理能力（現段階では、「自分の衣生活を主体的に営もうとする力」と解釈する。）が向上するために有効な授業内容を検討することにした。

これは、被服における意識の変容が衣生活管理能力の向上と関連があると考えからである。すなわち、授業実践を通して、受講生が被服の存在に着目する目を養い、着ることの意味を改めて問い直すことができれば、自分の衣生活を主体的に営もうとする衣生活管理能力を向上させることにつながるの考えからである。

本授業実践は、以下の3つの考えを基にして行った。

1つ目は、授業「着ごちの科学」の“着ごち”を被服の機能面からだけでなく、心理面からも見た二側面で捉え、被服材料や被服管理、被服史、被服の役割など、授業内容を総合的に構成することにした。現代ファッションはもはや被服の機能面だけでは語れないこと<sup>5)</sup>や衣

\* 島根大学教育学部初等教育開発（人間生活環境教育）講座

生活を主体的に営むためには、それに関わる内容を総合的に学ぶことに意義がある<sup>6)</sup>とする考えに基づくものである。

2つ目は、授業全体のめあてと称して、「私はなぜ被服を着るのか?」という追究課題を設定し、授業開始時から終了時まで継続して問うようにした。受講生が授業と向き合い、めあてについて自問自答を繰り返す中で、被服の根本、すなわち、着ることの意味を問うであろうと考えたからである。授業内容の流れおよび授業のめあては、表1に示す通りである。

3つ目は、授業「着ごちの科学」で得た知識が知識のまま終わることなく実生活で活用され、衣生活管理能力として移行していくためには、受講生が実感を伴う学びをすることが重要であると考え、実生活と結びつく実践的・体験的な活動を組み込むことにした。

表1 授業内容の流れおよび授業のめあて (全15時間)

全体のめあて	私はなぜ、被服を着るのか?
	↓
授業内容	今日のめあて
被服と現代 (被服と実生活の関わり)	被服と自分との関わりを見つめてみよう(「自分にとって、被服(を着る)とは?」の質問を含む) (2時間)
被服の意義 (被服と人との関わり)	被服と自分との関わりをもとに、被服の役割を考えよう (2時間)
被服の起源と変遷(被服の歴史)	被服の起源説や役割を想起しながら、被服の歴史を見てみよう (3時間)
被服材料 (繊維・糸・布)	私達が日々、着用している被服を構成する材料について概念と特徴を知ろう (2時間)
被服管理 (表示マーク)	繊維や表示マークを確認することを通して、自分が着用している被服の特徴・性質を知ろう (2時間)
被服管理 (洗剤・洗浄)	汚れの除去について説明することを通して、洗濯の原理を理解しよう (2時間)
被服と社会 (流行とライフステージ)	被服の流行とライフステージの関係を探ろう (1時間)
	↓
授業全体のふりかえり	「私にとって被服(を着る)とは?」について考えをまとめる (1時間)

## II 研究方法

### 1. 研究対象

2017年度前期に島根大学教育学部で専門教育科目「着ごちの科学」を受講した大学生22名(2年生15名・3年生5名・4年生2名)(男子4名・女子18名)を対象とした。

### 2. 調査時期

2017年4月～7月の授業時(毎週木曜日)に行った。

### 3. 研究方法と内容

毎授業後の個別ふりかえりカード(表1に示した今日のめあてについてふりかえり、気づきや考えを記述する。)や授業開始直後と全授業終了後の同質問内容(自分にとって被服(を着る)とは?)に対する考え・感想等の比較などを通して、受講生の被服における意識がどのように変容していったかについて分析を行うとともに、授業内容や方法との関連について考察した。

## III 結果および考察

受講生の被服における意識が授業実践によってどのように変容していったかについて、「1. 授業の実際」において、表1に示す授業内容の流れに沿って(一部の授業内容を除く)、結果および考察を述べていく。

### 1. 授業の実際

(1) 授業開始直後の受講生の被服における意識(1/15時間目)

「Iはじめに」で述べたような現代社会に紛れもなく生きる受講生が、被服というものについて、どのような意識をもっているか実態を探るために、「自分にとって、被服(を着る)とは?」というかなり幅広く、自由思考が可能な質問を記述回答で行った。記述式であるため、被服の役割に直結しない回答も予想されたが、分析の結果、受講生全員の回答が、現在、被服の役割として分類されている6項目<sup>7) 8)</sup>のうち、1項目を除く5項目にあてはまった。

この結果を基に、被服の役割の6項目(「生理・衛生」「生活・活動」「装飾・審美」「道徳・儀礼」「標識・類別」「仮装・擬装」と記述回答から出てきたキーワード(受講生一人ひとりの記述回答の中から、質問に対する本人の意見として代表されるワードを引用したもの。)を整理したものが表2である。

また、受講生が授業開始直後の自分達の被服における意識傾向を把握し易くするために、被服の役割6項目それぞれについて、キーワードを挙げていた人数をグラフにしたものが図1である。

表2 被服の役割とキーワード

被服の役割	記述回答から出てきたキーワード
生理・衛生	清潔、身を守る、暑さ・寒さ対策、日焼け防止、安全、快適、気候、気温、防御、温度調節、季節、汗を吸い取る、体毛代わり、外気
生活・活動	活動しやすい、サイズ、肌触り、その日の予定、軽い、着やすい
装飾・審美	全体の雰囲気、気分、楽しみ、ファッション悩み、似合う、自分を表す、個性、気合、幸せ、オシャレ、センス、テンション、印象、感性、性格、好きな色、自分らしいデザイン、自己満足、アピール
道徳・儀礼	スーツ、マナー、TPO
標識・類別	所属、部活動、帰属意識、一体感、バイト
仮装・擬装	

(人)

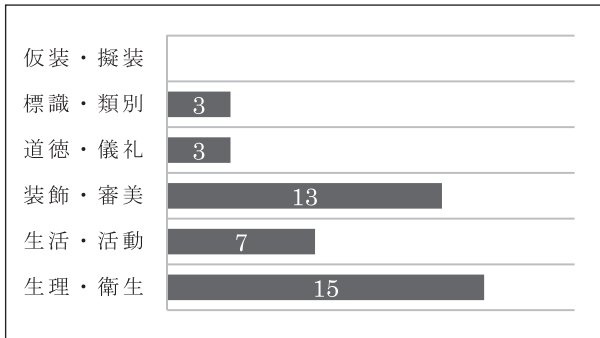


図1 「自分にとって、被服（を着る）とは？」

図1のグラフ結果をどのように捉えるかについて受講生に意見を求めたところ、主なものとして次のようなことが挙げられた。

- ・生理衛生上または装飾・審美上の役割が多く、自分もそこに重点を置いている。
- ・自分も装飾・審美が重要。服は自分を表現できる。
- ・大学生になって服にこだわるようになり、装飾・審美上の役割を求める者が多くなったのだろう。
- ・大学生はオシャレが一番！と考えていると思っていたが、生理・衛生上の役割も多く、結果が意外だった。
- 清潔でありたいという思いからだろう。
- ・装飾・審美と生理・衛生上の役割の両方が満たされる服があれば便利だ。

このように、グラフ結果についての捉えは、感想・気づきを述べたものから、大学生の被服における意識についての考察や被服そのものにおける主張を述べたものまで、広い視点での意見が挙げられた。

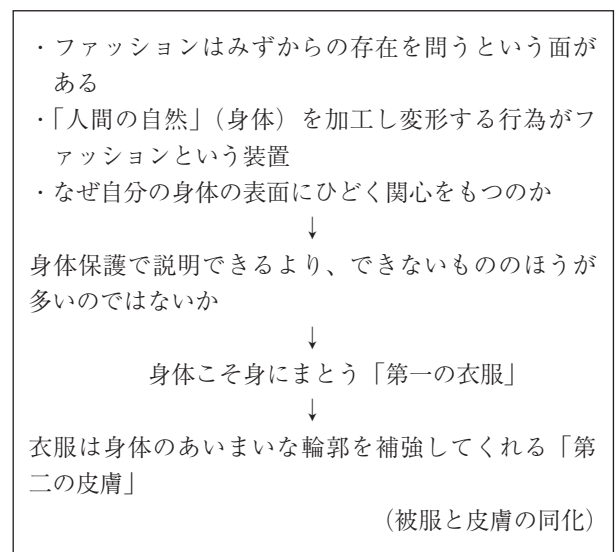
記述回答を整理した表2の結果および図1のグラフ結果についての受講生の意見から、授業開始直後の被服における意識は、“着ごこち”の機能面である自己の体調管理や、心理面である他者に対する身だしなみという生理・衛生上の役割を重視しつつも、ファッションを楽しむ、着飾るという装飾・審美上の役割が大きな位置を占めていることが明らかになった。また、図1のグラフ結果についての受講生の意見の中に、「自分にとって、被服（を着る）とは？」の教師の質問について考えることを通して、「普段何気なく衣服を選択している自分に気づいた。」や「生活に欠かせない身近な衣服のことであるのに、衣服の意味について考えることは難しい。どんな衣服にも目的や意味があって作られるのだな。」といった、被服の存在に着目したり、着ることの意味を問おうとしたりするものがあつたことに注目し、今後の授業にこれらの意見を活かすことの重要性を感じた。

そこで、受講生の被服における意識が変容していっていると思われる意見を「前回のふりかえり」と称して、毎授業の冒頭で取り上げ、受講生全員で共有することを通して、受講生同士の感想や気づきができるようにした。

(2) 被服の意義（被服と人との関わり）〈3・4/15時間目〉と受講生の被服における意識

この時間の授業では、今日のめあて「被服と自分との関わりをもとに、被服の役割を考えよう」を設定し、被服と人との関わりに着目することを通して、被服の意義を捉えさせるようにした。

そこで、被服と人との関わりについて哲学的に語っている鷲田の著書『ひとはなぜ服を着るのか』<sup>9)</sup>の内容を抜粋して示し、昔から皮膚に対して「第一の衣服」、被服に対して「第二の皮膚」という考えがあることを取り上げた。内容の抜粋と板書は次の通りである。



この時間の授業のふりかえりとして、主に次のようなものが挙げられた。

- ・身体と衣服を別々で捉えていたが、衣服は身体（皮膚）と同じくらい大事なものである。
- ・「皮膚は身にまとう第一の衣服」という捉えがあることに驚くと共に、被服を着る意義は一人一人の価値観によって異なり、改めて考えてみると面白い。
- ・被服の役割を普段、意識することはないが、自然と役割を果たせるよう自ら選択していることが分かった。
- ・衣服と皮膚が一体化しているという捉えだと分かり、「第二の皮膚」の捉えはファッションが進化する時代と共に変遷してきていると感じる。

また、印象深い授業のふりかえりとして、受講生Nは、身体を「第一の衣服」と見なす捉えについて、機能面では免疫の働きをする身体保護の役割として、心理面では皮膚の色や動作、肉体そのものが他者に向けた自己表現だとする考えを示して、この捉えに賛同した。受講生Nは授業開始直後に行った「自分にとって被服（を着る）とは？」の教師の質問に対して、ひと言、「体毛代わり」とユニークな回答をし、被服を身体保護の役割のみで捉えていた。しかし、授業のふりかえりからも推測できるように、被服の役割を“着ごち”の捉えと同様、二側面から考えていることから、被服における意識が広がりを見せる方向に変容しようとしていることが分かる。

上記の受講生Nをはじめとする授業のふりかえりから、被服と人との関わりに着目させるために、鷺田の著書を用いながら「第一の衣服」「第二の皮膚」という捉えを取り上げたことは、受講生が被服の存在に着目したり、着ることの意味を問ったりしながら被服の役割を考えることによって、被服における意識の変容を促すのに有効であったと考える。

### （3）被服の起源と変遷（被服の歴史…起源説）〈5・6/15時間目〉と受講生の被服における意識

この時間の授業では、今日のため「被服の起源説や役割を想起しながら、被服の歴史を見てみよう」を設定し、授業冒頭で、被服が人類に生まれたとされる被服の起源説<sup>10)</sup>を提示した。これは、大学生が被服の起源とされる諸説が現在、被服の役割として分類されている6項目と深い関わりがあることに気づき、改めて被服と人との関わりに着目し、着ることの意味を問うであろうと考えたからである。被服の起源説と被服の役割は対比して次のように板書した。

#### 〈被服の起源説〉

身体保護説  
環境適応説  
生体防護説  
装飾説  
護符説  
象徴説  
異性吸引説  
性差説  
自己顕示説  
審美説

#### 〈被服の役割〉

生理・衛生上  
生活・活動上  
装飾・審美上  
道徳・儀礼上  
標識・類別上  
仮装・偽装上

⇒

この時間の授業のふりかえりとして、主に次のようなものが挙げられた。

- ・服を着る行為は昔の人々にとって今より重要な行為「命を守る・地位を表すなど」だったのではないか。
- ・被服は自分と自分以外の人を結びつける役割がある。
- ・起源説がそれぞれ影響し合って、今の服に対する考えができていくと気づいた。
- ・被服の起源説の諸説から各国の文化（民族衣装など）が知られそうだ。
- ・起源説として集団を表す意味の説があってもよいと思うが、(提示された) どの説に属するのだろうか？

上記のような授業のふりかえりから、着ることが当たり前前の行為となっている現代を捉え、着ることの意味を問うものや、起源説から被服の役割に結びつける気づきなど、大学生の被服に対する意識の深まりがでてきていることが分かる。

また、被服に対する意識の変容が進んでいると考えられる受講生Wのふりかえりは次の通りである。

- ・前回の授業（鷺田の著書を用いた授業）で、「人間は複雑な理由から服を着る」（哲学的！）と思った。だからこそ、なぜ自分達が服を着るのかを考えることは、よりよい衣生活、実生活につながり、大切なことだと思った。

受講生Wは、授業開始直後に行った「自分にとって被服（を着る）とは？」の教師の質問に対して、「外的環境から身を守るもの・活動しやすくするためのもの・好きな色やデザインで楽しむもの・・・」など、被服の役割である生理・衛生上や生活・活動上、装飾・審美上といった視点から五つの内容を回答していた。

このふりかえりで受講生Wは、授業全体のめあてとして設定している「私は、なぜ被服を着るのか？」を念頭に置きながら、被服を着ることの根本、すなわち、着ることの意味を問うことの大切さに気づき始めていることが分かる。また、このふりかえりは、自分の衣生活を主体的に営もうとする衣生活管理能力につながることを実感させるものである。

近年、中学校家庭科被服学習の課題としても取り上げられていることに、「自分と被服との関わり」がある。教科書では、衣服のはたらきについて、衣服の機能のみの記述であり、衣服を着用する主体者である自分が抜け落ちていることを懸念する考えがある。<sup>11)</sup>

このような考えからも、衣生活を主体的に営む力に身に付けるためには、着ることの意味を問うことが大切であると考えられる。

(4) 被服の起源と変遷(被服の歴史…被服の形態)〈7/15時間目〉と受講生の被服における意識

この時間の授業では、今日のめあて「被服の起源説や役割を想起しながら、被服の歴史を見てみよう」を継続し、人類最初に用いられたとされる布や被服、被服の形態などの歴史について、被服の起源説や役割を想起しながら捉えさせるようにした。この中で、具体的内容として、「一枚の布から」の実践を取り上げることにする。

被服の形態として、巻衣と縫製服に大別されることを提示した後、一枚の布を身体に巻きつけて着装する巻衣について、数名のグループに分かれて体験学習を行い、古代人モデルになって一枚の布から巻衣を考えさせ、実際に着装して考えや感想と共に全体発表する方法をとった。

この授業のふりかえりとして、主に次のようなものが挙げられた。

〈授業内容について〉

- ・(実際に着装してみると) 活動しにくい、季節によっては寒い、露出部分が多く恥ずかしい、着脱が困難→(このようなことから) 縫製服に進化した素材の改良につながったのではないかと。
- ・巻き方(身体をどのように覆うか)をすごく工夫したのだろう→巻き方ひとつひとつに被服の役割を求めたと思う。
- ・自分のグループは巻衣を考える時、見た目の美しさ(装飾・審美上の役割)をメインにしたが、そのため被服の機能性(生活・活動上の役割)に欠けてしまった→自分達が着ている現代の服は様々な試行錯誤によってできたものだと、改めて見直した。

〈授業方法について〉

- ・他グループの発表で考えや感想を共有できたことは、自分達のグループにないものだったので、とても参考になった。
- ・実際に(着装を)体験することの楽しさや学びの印象深さを感じた。

受講生Fは、この授業のふりかえりを授業内容と方法の両面から次のように記している。

〈授業内容について〉 被服形態で昔と今の被服の役割が変遷していることを学び、この授業を通して自分の被服に気を配るようになった。

〈授業方法について〉 他者の意見を聞き、季節やその時代の状況、変化などに伴って求める被服の役割が変わっていくことが分かった。

受講生Fは、授業開始直後に行った「自分にとって被服(を着る)とは?」の教師の質問に対して、「身を守るもの、自分を表すもの」と客観的で単純な回答をしていたが、この授業のふりかえりから、着ることの意味を問い直し、被服を自分との関わりで捉えようとする意識に変容していることが分かる。

上記の受講生Fをはじめとする授業のふりかえりから、

被服の歴史を捉えさせるために、被服の起源説や役割を想起しながら、ひとつの授業場面に一枚の布を用いた体験学習を取り入れたことは、授業内容においても方法においても有効であったと考える。

(5) 被服管理(表示マーク)〈10・11/15時間目〉と受講生の被服における意識

この時間の授業の前に、今日のめあて「私達が日々着用している被服を構成する材料について、概念と特徴を知ろう」を設定し、被服材料(繊維・糸・布)の授業実践を行った。上記の授業の受講生のふりかえりの中に、「普段、何気なく被服を着ていても、素材(厚さや肌触り)は気にかけていたが、(品質や取り扱いの)表示をわざわざ意識していなかった」という記述があったことを受け、被服管理(表示マーク)の授業を構想した。

この時間の授業の今日のめあては、「繊維や表示マークを確認することを通して、自分が着用している被服の特徴・性質を知ろう」と設定し、自分が着用している被服や衣生活が知識と結びつき、実生活に活用できるよう工夫した。

具体的には、受講生が実生活でよく着用している被服を持ち寄り、品質表示や取り扱い表示の意味を調べたり、グループ内で、持ち寄った被服の表示マークを比較したりすることによって得られた気づきや感想等をグループ発表し、全体で共有する方法をとった。また、コメンテーター役を数名募り、発表内容についてコメントを述べることを通して、グループの気づきや感想が全体でさらに深まるよう配慮した。

各グループの発表内容を大別すると、被服選択や購入時の意識、品質表示や取り扱い表示の相互関係、用途や目的に合った着用、実生活への役立て方などに関するものであった。

この時間の授業のふりかえりとして主に次のようなものが挙げられた。

- ・繊維の性質や特徴を知っていれば、被服の用途に合わせて選択を変えることができると思った。
- ・混紡の服全てが繊維の長所・短所を補っているわけではないので、使用する用途・目的に合わせた服の着用が大切であると思った。
- ・普段、意識し忘れていた表示マークだが、自分の衣服を長く美しく着るためには表示マークの存在がとても大切だと気づいた。
- ・授業の内容と実生活をつなげて考えると、表示マークの表す意味も理解しやすく、楽しい授業だった。(受講生S)

上記の受講生のふりかえりから、実生活でよく着用する被服について、表示マークからその被服の特徴・性質を理解し、自分の被服の着方や衣生活に活用していこうとする意識がうかがえる。また、受講生Sのふりかえりのように、授業内容が知識を学ぶことだけでなく、自分

が着用している被服と結びつけて考えることで楽しく理解でき、実感を伴った学びとなることを示した意見もあった。これらのふりかえりが、今後どのように、主体的に衣生活を営もうとする衣生活管理能力として定着していくかを探ることが課題である。

## 2. 授業開始直後と全授業終了後の受講生の被服における意識の比較

授業開始直後に受講生にたずねた「自分にとって被服（を着る）とは？」と同内容の質問を全授業終了後にも行い、授業前後の回答の比較を通して、被服における意識の変容を探った。全授業終了後の受講生の被服における意識を整理したものが表3である。（比較し易いように、前掲の表2も示す。）

表2 授業開始直後の被服における受講生の意識

被服の役割	記述回答から出てきたキーワード
生理・衛生	清潔、身を守る、暑さ・寒さ対策、日焼け防止、安全、快適、気候、気温、防御、温度調節、季節、汗を吸い取る、体毛代わり、外気
生活・活動	活動しやすい、サイズ、肌触り、その日の予定、軽い、着やすい
装飾・審美	全体の雰囲気、気分、楽しみ、ファッション悩み、似合う、自分を表す、個性、気合、幸せ、オシャレ、センス、テンション、印象、感性、性格、好きな色、自分らしさ、自己満足、アピール
道徳・儀礼	スーツ、マナー、TPO
標識・類別	所属、部活動、帰属意識、一体感、バイト
仮装・擬装	



表3 全授業終了後の被服における受講生の意識

被服の役割	記述回答から出てきたキーワード
生理・衛生	清潔、環境、外気との調和、生理的、身体を守る
生活・活動	快適な生活、活動的
装飾・審美	おしゃれ、装飾、装飾優先
道徳・儀礼	環境に合わせる
標識・類別	所属
仮装・擬装	
被服の役割6項目に当てはまらない回答	自分を表す体の一部、自分的一部、自分と一体化するもの、自身の大切な一部、社会の中の自分という存在を表す、ひとつの個性、内面を映す自分自身、自己表現、自分らしさを示す、その日の自分を表す、生活の一部、自身の最大限のアピール、自身の中で欠くことのできないもの、欠かせない行為、自分を幸せにしてくれるもの、心を変化させるもの、動作の中に様々なものが含まれる面白いもの、社会からこう見られたい・こう見られたくないもの、対社会、無意識に選り意識的に判断するもの、大きな意味をもつもの、当たり前に着られることへの感謝 など

授業開始直後の回答（表2）は、「(1) 授業開始直後の受講生の被服における意識」で述べたように、現在、被服の役割として分類されている6項目のうち1項目を除く5項目に全て当てはまった。しかし、全授業終了後の回答（表3）では、被服の役割の項目である生理・衛生上や装飾・審美上の役割などのキーワードを挙げている受講生も数名いたが、殆ど全ての者が被服の役割の6項目に当てはまらない回答を示した。この結果は、授業全体のめあて「私はなぜ被服を着るのか？」を追求課題として自問自答し続けることによって、受講生の被服における意識が、被服の根本、すなわち、着ることの意味を問い直すものへと変容していったからだと考える。

表3の回答のうち、被服の役割6項目に当てはまらない回答について、被服における意識の変容を詳しく探るため、受講生一人ひとりの記述回答の中にあつたワードを加えながら、いくつかの視点を設けて整理した。

回答としては、被服と自分との関わりからの視点で記述したものが多かったが、今後の自分の衣生活の営み方の視点から回答し、衣生活管理能力の向上につながると思われるものもあった。また、被服における意識の変容を直接記述した回答もあり、受講生の被服における意識の変容を明確に見ることができた。

詳しくは、次のような回答が挙げられた。

〈被服と自分との関わり〉の視点からの回答  
 欠かせない行為、自分という存在や自分らしさ、一つの個性、自分を表す体の一部、自分と一体になって共に役割を果たすもの、自分の心理を変化させるもの、動作の中に様々なことが含まれた面白いもの、自分を楽しませ幸せにしてくれるもの、無意識に選り意識的に判断するもの など

〈今後の衣生活〉の視点からの回答

- ・より良く生活できるよう知識を活用したい
- ・人生で役に立つ被服生活をしたい
- ・もっと被服について考え、大切に衣生活を営みたい
- ・機能面だけでなく心理面も考えて被服を着ることができるようになりたい

〈被服における意識の変容〉を直接記述した回答

- ・服への意識が変化した。服はただの布切れではない！
- ・他者に影響を及ぼすので着ることはそれだけで大きな意味をもつ
- ・被服を着ることが当たり前にできることへの感謝（受講生N：授業開始直後の回答は「被服は体毛代わり」であった）
- ・自分を最大限にアピールする物、これが自分にとっての着ごちである（大学生O：授業開始直後の回答は「被服は外気との調和」であった）
- ・日頃から被服について考えるようになり、自分の内面のことまで意識するようになった。何も気に

しなかった被服が自分の中で欠くことのできないものになった(受講生R:授業開始直後の回答は「服にこだわりがない。強いて言えば軽いもの、好きな色のものを着るくらい」であった)

### 3. 被服における意識の変容と授業内容の関連

全授業終了後に、授業開始直後と同内容の質問「自分にとって被服(を着る)とは?」に加え、受講生の被服における意識の変容がどの授業内容と関連があったかを探るため、受講生に「次の授業項目の中から、被服における見方・考え方・印象などが変わったものを3つ程度選んで回答しなさい」という質問を行った。(回答人数は22名全員、そのうち、3つ以上選択した者も多くいた。)

示した項目と回答結果は表4の通りである。

回答結果から、「被服の役割」を選択する者が多いことは予測されたが、他の項目に比べて、「着ごちの二側面」や「第二の皮膚」を選択した者が多かった理由は、被服について改めて着目し、着ることの意味を問うきっかけになったからだと推測する。また、被服の着方や自分の衣生活への活用という点で、「表示マーク」や「被服のライフステージ」を選択した者が多かったと考えられる。「巻衣と縫制服」を選択した者が多かったのは、一枚の布を用いた体験学習が印象深く、実感を伴う授業であったためと考えられる。

また、表4の回答結果を基に、受講生の衣生活管理能力を向上させるために有効な授業内容の検討を授業項目から探ろうとした。しかし、表4の回答結果からは、選択した者の多い項目間の関係性や選択した者の多い項目と少ない項目の関係性が十分に分析できず、課題が残る結果となった。

表4 被服における意識の変容と授業内容の関連 (人)

着ごちの二側面	6	被服の変遷と特徴	2
被服・衣服・着装	0	被服材料	3
第一の衣服	1	織物(三原組織)	2
第二の皮膚	6	天然繊維化学繊維	1
被服の役割	12	表示マーク	13
被服の起源説	3	布地の性質	4
人類最初の布	0	洗剤と洗浄	5
最古の被服と目的	1	繊維の開発	1
巻衣(一枚の布)と縫制服	6	被服のライフステージ	6

## IV まとめ

本研究は、専門教育科目「着ごちの科学」を受講した大学生を対象に授業開始直後の被服における意識と全授業終了後の意識を比較し、授業実践を通して、その意

識がどのように変容していったかを明らかにするとともに、受講生が現在まで培ってきた衣生活管理能力をより向上させるために有効な授業内容の検討も行った。

服装についての自由化や既製服の選択・購入が容易な現代社会に生きる受講生の被服における意識と授業実践後の意識の変容を分析した結果、次のことが明らかになった。

授業開始直後に行った教師の質問「自分にとって被服(を着る)とは?」の回答では、生理・衛生上の被服の役割を重視しつつも、殆どの受講生がファッションを楽しむ、着飾るといふ装飾・審美上の役割を被服に求めていることが分かった。しかし、全授業終了後の同内容の質問回答では、「社会の中の自分という存在を表す、自分と一体化するもの」などという、被服を自分との関わりから捉え、実生活に必然的に存在している被服について、着ることの意味を問い直す意識に変容していったのであった。また、今後の自分の衣生活の視点から回答したのものには、「もっと被服について考え、大切に衣生活を営みたい」「人生で役に立つ被服生活をしたい」などの意見があり、これからの衣生活を主体的に営もうとする力の向上につながるものもあった。

このように、受講生の被服における意識が変容していった理由として、次のようなことが考えられる。

- ・ 鷲田の著書『ひとはなぜ服を着るのか』(抜粋)を用いて、被服と人との関わりに着目するようにしたこと
- ・ 被服における“着ごち”を機能面と心理面の二側面で捉えるようにしたこと
- ・ 被服の歴史(一枚の布から)や被服管理(品質表示と取り扱い絵表示)の内容を実際に体験したり実生活と結びつけたりしたこと
- ・ 「全体のめあて」や「今日のめあて」を設定し、追究課題を明確にするとともに焦点化するようにしたこと、また、「今日のめあて」について毎回授業後に、個別のふりかえりを行い、自己の追求について確認するようにしたこと

しかし、研究目的のひとつであった受講生がこれからの衣生活を主体的に営もうとする衣生活管理能力の向上のために有効な授業内容の検討については分析不足な点が多く、課題が残った。

衣生活管理能力の向上には、授業内容として被服の根本、すなわち、着ることの意味を問い直すこと、また、授業方法として知識が実生活と結びつき実感を伴った学びとなるよう実践的・体験的な学習を取り入れることが重要と考え授業実践を行った。確かに、全授業終了後の回答や毎授業後のふりかえりの中に、衣生活管理能力の向上につながるであろうと考える意識も表れたが、明確なものとは言えない。

今後は、現段階で解釈している衣生活管理能力の概念(自分の衣生活を主体的に営もうとする力)をより明確、かつ具体的にした上で、衣生活管理能力を向上させるために有効な授業内容の検討が必要であると考えらる。

## 【引用・参考文献】

- 1) 能澤慧子 (2016) 世界服飾史のすべてがわかる本。ナツメ社、pp.220-225.
- 2) 朝日新聞 (2017. 1.19) 記事—fashion. 朝日新聞社
- 3) 前掲書 2)
- 4) 名倉光雄・梶山藤子・高橋春子・山田寿子 (1989) 被服学概論. 相川書房、pp. 1-4.
- 5) 鷺田清一 (2015) ひととはなぜ服を着るのか. ちくま文庫、pp. 16-18.
- 6) 難波知子・成田千恵・扇澤美千子 (2016) 被服製作実習の改善策の検討—茨城キリスト教大学紀要第50号. 茨城キリスト教大学、pp. 143-155.
- 7) 名倉光雄・梶山藤子・高橋春子・山田寿子 (1989) 被服学概論. 相川書房、pp. 5-10.
- 8) 大竹美登里ほか72名 (2016) 高等学校家庭科用教科書「家庭総合」. 開隆堂、pp. 152-153.
- 9) 鷺田清一 (2015) ひととはなぜ服を着るのか. ちくま文庫、pp. 18-34
- 10) 前掲書 7)
- 11) 佐藤園・原田省吾・小橋和子 (2008) 中学校家庭科小単元—外観・被服・私で考える衣生活—教科書試案. 岡山大学教育学部、pp. 78-87.